

# 第2回全国同人雑誌最優秀賞決定

## まほろば賞

全国同人雑誌振興会・文芸思潮による第二回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」の選考会が八月九日東京青梅の「かんぼの宿・青梅」で行なわれました。

全国からの事前投票者八名をもとに、当日参加選考委員一五名、特別選考委員七名により、候補作「セラピープロジェクト」(木戸順子)、「弦」(82号)、「海辺の家」(近藤勲公)、「日田文学」(53号)、「それぞれの深紅」(遠野明子)、「槐」(25号)、「賀状」(鈴木信一)、「文芸東北」(502号)、「蜘蛛の部屋」(谷口葉子)、「カプリチオ」(26号)、「風景―イヌイットの皮袋―」(山口馨)、「渤海」(54号)、「魚の時間」(中山茅集子)、「ふくやま文学」(20号)の作品について激しい議論が交わされました。

それに基づいた投票の結果、第二回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」は鈴木信一氏の「賀状」と決定いたしました。また僅差の次点として近藤勲公氏の「海辺の家」に、特別賞を贈ることになりました。

また「セラピープロジェクト」(木戸順子)、「それぞれの深紅」(遠野明子)、「蜘蛛の部屋」(谷口葉子)、「風景―イヌイットの皮袋―」(山口馨)、「魚の時間」(中山茅集子)は、優秀賞として賞揚することになりました。ここに決定とその内容を報告し、受賞作品を賞賛したいと思います。

「まほろば賞」受賞作品には、賞状と賞金十万円(堀内守氏・山川京子氏などの寄付によるものです)、記念トロフィー、記念品(吉川英治色紙)を贈らせていただきました。特別賞には、賞状・賞金二万円・記念トロフィー・記念品などを、また優秀賞には、賞状・賞金一万円・記念メダルを授与させていただきました。

今後とも全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈願し、たくさんの方の同人雑誌の作品が全国同人雑誌振興会・文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。第三回の全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」対象の同人雑誌は二〇〇六年一月一日より二〇〇八年十二月三十一日までの発行の同人雑誌とさせていただきます。奮って御応募ください。

また、どうぞ公開選考や投票にも多数の方が御参加くださり、自らのお手で同人雑誌の優秀作品を育てていただきたいと思います。

なお、現在全国同人雑誌最優秀賞は、昨年親しみやすい名前を公募した結果「まほろば賞」と呼称することになりました。この名前で同人雑誌最優秀賞に親しんでいただけましたら幸いです。

(全国同人雑誌振興会／文芸思潮)

## 全国同人雑誌最優秀賞

### まほろば賞

「賀状」

鈴木信一

(「文芸東北」502号)

### 特別賞

「海辺の家」

近藤勲公

(「日田文学」53号)

### 優秀賞

「セラピープロジェクト」

木戸順子

(「弦」82号)

「それぞれの深紅」

遠野明子

(「槐」25号)

「蜘蛛の部屋」

谷口葉子

(「カプリチオ」26号)

「風景―イヌイットの皮袋―」

山口馨

(「渤海」54号)

「魚の時間」

中山茅集子

(「ふくやま文学」20号)

まとまった文章など書いたこともなかったくせに、私には「書くこと」に対する確信だけがありました。そこで、ある日、自家製文章読本と称して、「書くこと」についての自分の考えを原稿用紙に一気にとめ上げることになった。小説を書き始めたのはそれからです。自分の考えが正しいことを証明するには、自分が書いて見せるしかないと思ったのです。いま思えば、なんて傲慢な、なんてふしだらな動機でしょう。

しかし、心配はご無用です。小説はそんな浅薄の輩やからを決していい気にはさせておきません。そうです。私は何度挑戦しても、小説で結果を出すことはできなかったのです。だからでしょうか。私は一方で、小説を書くというこの困難な仕事に、いつの間にかはまり込んでいました。「書くこと」の中にある恍惚と不安、すなわち魔物を見てしまったのです。そして、気づいたときには、十年の歳月が流れておりました。

過日、自家製文章読本は、『800字を書く力』（祥伝社新書）となつてやっと世に出ることができました。しかし、小説との闘いは始まったばかりという気がしております。また、自分がまだまだ未熟であることも、このたびは思い知りました。「まほろば賞」の公開選考会は議論百出、と



鈴木信一

すずき しんいち

1962年埼玉県生まれ。横浜国立大学教育学部国語科卒業。埼玉県狭山緑陽高等学校教諭。著書に『800字を書く力』（祥伝社新書）がある。宮本輝氏選・第37回北日本文学賞選奨、第18回東北北海道文学賞など受賞。

でも素晴らしいもので、先生方の批評の確かさに舌を巻きながら、自分自身何度も反省いたしました。「まほろば賞」の公開選考会に立ち会えたことは、あるいは賞を頂戴したこと以上に貴重なことだったのかもしれない。

さて、拙作にお目を留めてくださった「芸芸思潮」の存在がなければ、今回のことは何も始まりませんでした。「芸芸思潮」の全国同人雑誌評および全国同人雑誌振興会の方々には、あらためて感謝申し上げます。また、選考委員の先生方や関係の方々にも、この場を借りて御礼申し上げます。賞の名を汚さぬよう一層精進してまいります。みなさま、今後ともどうかご指導をよろしくお願いいたします。

今回の特別賞受賞にあたって日田文学の江川先生をはじめ関係者各位に厚くお礼申し上げます。

私は大分県の津久見市、東九州独特のリアス式海岸と海に迫る密柑山の狭間にひろがる地域で、JA（農協）職員として長年勤務しております。

過疎の進む市でも、担当してきた半島部は特に高齢化が進み、作品「海辺の家」に描かれるような老老介護の家が各浦々に実態として点在しております。その環境でJAの介護事業に携わり、地域の高齢化問題がいかに深刻なものであるかを実感し、それが「海辺の家」のモチーフとなっています。

主人公の安西ノキには実在のモデルがおり、やはり高齢の配偶者の介護をしておりますが、作品に描いた程深刻な状態ではありません。昔と比べれば介護保険による体制の充実はかなり浸透してきておりますが、これから訪れる超高齢化社会が個人の人生にどのようなドラマをもたらすのか、それを把握し今後の創作のヒントにできるかは、ひとつの課題だと思います。

いずれにしてもこの作品が評価をいただいたことで、次の創作への意欲を喚起させていただいたことに深く感謝いたします。



近藤勲公

こんどう のりひろ

1958 大分県津久見市生まれ  
1992,1997,2000 九州芸術祭文学賞大分県地区代表  
「日田文学」同人  
JA 大分県合併事務局勤務

